

COLUMBIA UNIVERSITY

IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives
Celebrates 50 Years of

TREASURING THE PAST
ENRICHING THE PRESENT
TRANSFORMING THE FUTURE

コロンビア大学

中世日本研究所・日本文化戦略研究所
創立50周年記念行事

和楽器ルネサンス



2018年11月8日(土) 18:30 開演
東京・よみうり大手町ホール

表紙図版：『菊の精物語』（ハーバード大学美術館蔵）より

ごあいさつ

本日はお忙しいなか、コロンビア大学中世日本研究所・日本文化戦略研究所創立50周年を記念する演奏会「和楽器ルネサンス」にご足労いただきありがとうございます。

日本ではまだご存知でいらっしゃる方々も多いかも知れませんが、近年和楽器の世界では特に若い世代の演奏家、作曲家の活躍が著しく、日本の国内外を問わず「ルネサンス」とも呼ぶべき現象がおきています。そうした大きな動きを蔭から支えるべく、当研究所ではここ十数年ほど和楽器のグローバル化に力を注いでいます。今晚はこれまでの活動を少しばかり振り返りつつ現在進行中のプロジェクトも提示させていただきますが、この演奏会を通して和楽器・和音楽の素晴らしさ、面白さ、楽しさをご来場の皆さまにご堪能いただけましたら幸いです。

今回コロンビア大学雅楽アンサンブルの選抜メンバーの出演に際しては、公益財団法人東芝国際交流財団、独立行政法人国際交流基金日本語研修センター、株式会社武蔵野楽器からのご支援ご協力を頂戴しております。将来のリーダーとなる若い人材の育成には長期的視野がかかせませんが、そうした慧眼をお持ちの方々がいらっしゃることは大きな心の支えとなっています。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

当研究所はこの半世紀にわたってさまざまなプログラムやプロジェクト、システムを立ち上げましたことを自負しておりますが、皆さまとともに次の50年へと踏み出してゆく所存でございますので、引き続きご支援ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

では、90分ほどの短いお時間ですが、演奏会をお楽しみくださいませ。

コロンビア大学
中世日本研究所・日本文化戦略研究所
所長 バーバラ・ルーシュ

プログラム

尺八本曲「鶴の巢籠」

「平調音取、越天楽」

コロンビア大学雅楽アンサンブルメンバー

「越天楽」による即興演奏

一柳慧「密度」(1984)

乙前の今様復活プロジェクト

～『梁塵秘抄』に残されたウタを現代に～

(2018) (世界初演)

下野戸亜弓「第566番 いつしかと君にし思ひし」

「第265番 金の御嶽にある巫女の」

三浦寛也「第336番 百日百夜はひとり寝と」

「第460番 恋ひ恋ひて」

「第26番 仏は常にいませども」

金子純恵「第359番 遊びをせんとや」

本條秀太郎「歌垣」(1990)

三味線と尺八による即興演奏

菅野由弘「菊花香乱～かざしの姫の物語より～」(2018)

(世界初演)

PROGRAM NOTES

尺八本曲「鶴の巢籠」

演奏 尺八： ジョン海山ネプチューン

代表的な尺八古典本曲の一つ。尺八本曲とは「尺八のみの、尺八のための曲」という意味です。精神性に重点をおいたものが多いなか、「鹿の遠音」とともに描写的な作品として一般にもよく知られた作品。雛鶴の誕生から親鳥の愛情、子鶴の巣立ちを経て親鶴の死にいたる物語を曲想とした標題音楽で、擬音的效果音や特殊奏法を駆使して鶴の鳴き声や羽ばたく音を表現しています。おめでたい兆しの鳥でもある鶴をテーマとした「鶴の巢籠」を5分ほどの凝縮版でお聴きいただきます。

平調音取、越天楽（コロンビア大学雅楽・邦楽プログラムの学生による演奏）

演奏 笙： ザック・セリグマン・カレン、宮田まゆみ（助演）

箏楽： デヴォン・ティップ、ルツィエ・ヴィッコバ

龍笛： リッシュ・リンズイー、コール・ワグナー

コロンビア大学雅楽・邦楽プログラムで学んだ学生から優秀な学生を選抜し、代表的な雅楽古典曲「越天楽」を披露します。海外ではかねてより「前衛的」な音楽として注目されていた雅楽ですが、その音色には海外の人々も魅了されています。

越天楽にはいくつかありますが、寺社仏閣や結婚式などでよく耳にする越天楽は、平調と呼ばれるミ（E）の音を基にした調子のもので、音合わせとともに曲の雰囲気をつくり出す「音取」が前奏として演奏されます。

「越天楽」による即興

演奏 尺八： ジョン海山ネプチューン



一柳慧「密度」（1984）

演奏 箏Ⅰ： 寺井結子

箏Ⅱ： 中島裕康

三絃： 平田紀子

尺八： 黒田鈴尊

現代音楽の最先端で活躍する一柳慧は早くから和楽器にも目を向けた作曲家で、常に進化を遂げてきています。当研究所の顧問にもなっている同氏は若い音楽家へのサポートにも非常に熱心で、今回は和楽器を用いた比較的初期の傑作「密度」を若い日本人邦楽演奏者に披露していただきます。



乙前の今様復活プロジェクト

演奏

うた： 下野戸亜弓
うた： 金子純恵
鼓： 藤舎花帆
ヴァイオリン： 林周雅
アコースティックベース： 棚橋俊幸

乙前は平安末期に活躍した今様を歌う芸能者です。乙前の歌に入れ込んだ後白河天皇は彼女から直接多くの今様を学び、『梁塵秘抄』として書き残しました。現在566の今様歌詞が伝わっていますが、歌詞が書き残されているのみにとどまっています。さまざまなテーマの歌詞から普遍的と思われるものを選択し、音楽にのせることで乙前の芸術を現代に蘇らせます。これまでも同様の試みがいくつかなされてきましたが、このプロジェクトでは「今様」すなわち当時の「現代流行歌」という側面を重視し、今日の「今様」というジャンルを新たに模索します。今夜披露するのは5ヵ年計画「乙前の今様復活プロジェクト」の幕開けとなる6曲で、作曲者三者三様の作品をお楽しみください。

下野戸亜弓作曲 乙前歌詞『梁塵秘抄』第566番 (2018) (うた)

いつしかと
君にと思ひし若菜をば
法のためにぞ
今日は積みつる

下野戸亜弓作曲 乙前歌詞『梁塵秘抄』第265番 (2018) (うた、鼓)

金の御嶽にある巫女の
打つ鼓 打ち上げ打ち下ろしおもしろや
われらも参らばや ていんととうとも響き鳴れ
響き鳴れ
この音の絶えせざるを いかに打てばか 打つ鼓

三浦寛也作曲 乙前歌詞『梁塵秘抄』第336番 (2018) (うた、鼓、ヴァイオリン)

百日百夜はひとり寝と
人の夜妻は何せうに 欲しからず
宵より夜半まではよけれども
曉 鶏鳴けば床寂し

三浦寛也作曲 乙前歌詞『梁塵秘抄』第460番 (2018) (うた、鼓、ヴァイオリン)

恋ひ恋ひて
たまさかに逢ひて寝たる夜の夢は
いかが見る
さしさしきしと抱くところぞ見れ

三浦寛也作曲 乙前歌詞『梁塵秘抄』第26番 (2018) (うた、鼓、ヴァイオリン)

仏は常にいまでも
現ならぬぞあわれなる
人の音せぬ暁に
ほのかに夢見えたまふ

金子純恵作曲 乙前歌詞『梁塵秘抄』第359番 (2018) (うた、ベース)

遊びをせんとや生まれけむ
戯れせんとや生まれけん
遊ぶこどもの声きけば
わが身さへこそゆるがるれ

Could it be we're born for pleasure?
Can it be we were born for games?
The joyful shouts of children playing
always stir me up again,
old as I am,
even me,
all of me.



❖ ❖ ❖

本條秀太郎「歌垣」(1990)

演奏 三味線： 本條秀太郎
 三味線： 本條秀慈郎

「永遠に青い星（地球）と共存できる。自然を愛する“ひと”でありたいと思う。昔、大和人が恋を語る時、秘めた胸のほむらをおおらかな恋歌で交わしました。そんな時は、誰をも、やさしく……歌垣。歌垣の恋心と豊かな地球人を求める心を重ね合わせ……感謝！」（作曲者自身によるCD『海照』ライナーノーツより）

本條秀慈郎と小濱明人による即興演奏

演奏 三味線： 本條秀慈郎
 尺八： 小濱明人

本條秀慈郎と小濱明人はそれぞれアジア・カルチュラル・カウンシルの招きでニューヨークに長期滞在の機会を得、当研究所がニューヨークで毎春開催している年次和楽器演奏会にも出演経験があります。帰国後は文字通り世界を股にかけた活躍をし、今後和楽器のグローバル化において一層重要な役割を果たしていくことでしょう。古典、現代作品の演奏のみならず即興でも定評のあるこのお二人が、今晚は息の合った演奏で和楽器を用いた音楽の楽しさを披露してくれることでしょう。



菅野由弘「菊花香乱～かざし姫の物語りより～」（舞踊付器楽曲）（2018）

中世日本研究所・日本文化戦略研究所が手がけた初期の大プロジェクトの一つが奈良絵本・絵巻の調査研究でしたが、そのなかには大変魅力的な物語が数多くあります。そのなかから今晚は「菊の精物語（かざしの姫の物語）」（ハーバード大学美術館蔵）をもとにした菅野由弘の新作「菊花香乱」をお楽しみください。

演奏 能管： 一噌幸弘
 笙： 宮田まゆみ
 琵琶： 首藤久美子
 箏： 深海さとみ
クラリネット： 板倉康明
ヴァイオリン： 大谷康子
チェロ： 荻田雅治
舞い人： 中村梅彌
 花柳達真

昔、五条あたりに源中納言という人がいましたが、その姫君は御名をかざしの姫君といいました。（かざしは、花を愛し、かざしたところからの名。）髪のかかり方、眉、口つきは美しく、春も秋も花の下で日暮らし、なかでも菊をならべて愛し、長月の頃は庭のほとりを離れがたい日々を送っていました。

十四歳の晩秋、菊の花が色あせてゆくのを眺めていたところ、年の程二十余りの薄紫の狩衣をまとった貴公子が菊のなかから現れました。華やかなやんごとなき風情の彼が寄り添うので、姫君は夢かうつつか分からぬままに起き騒ぎます。彼が姫君のお袖を控え「どうして露ほどの情けもないのでしょうか」と言って色々の言葉を尽くしたところ、姫君もしみじみとした気持ち がわき上がり、夜半の下紐をとき、うちとけ、一晚中來し方行く末を語り明かしました。

暁の頃、このまれ人は籬(まがき)の菊のほとりまで行くかと見えて、面影が消えるのです。かざしの姫君は不思議に思いながらも、互いの契りの日数をかさねます。あるとき姫が「御名を知らせ給へかし」と問いますが、謎の答えを残して帰って行きます。

その頃、帝の花揃えがあるとのことで、父の中納言にも「菊の花揃へ奉れ」との綸言(天子のことば)がありました。

さて少将はその日の暮れ方、いつもよりうちしおれ、世のはかなさを語り、涙ぐみます。姫君の「いかなることをおぼしめしわづらひ候ぞ。心を残さず語り給へかし」との言葉にも「今は何をかつつみ候べき。見え参らせんことも、今日を限りとなりぬれば、いかならむ末の世までと思ひしことも、皆いたづらごととなりなんことの悲しさよ」と言って、さめざめと泣くばかり。

少将は「今ははや立帰らなむ。あひかまであひかまでおぼしめし忘れ給ふな。自らも、御心ざしいつの世に忘れ奉るべき」などと言って、髪を切って薄紙に包んで姫君に渡し、「これを見て私のことを思い出してください。形見とっていただいても構いません」と言って泣く泣く出て行った。姫君も御簾のほとりまで忍び出て、少将が庭の籬のあたりに佇んでいるだろうと見やるのだが、彼の姿は見えない…。



(扇画) 田島奈須美

作曲家・演奏家 略歴（五十音順）



一噌幸弘 Yukihiro ISSO（写真 回里純子）

安土桃山時代より続く能楽一噌流笛方15代目、能楽古典の演奏の他に、篠笛や田楽笛、リコーダー、角笛などを演奏、能楽の音楽をベースとした世界に類を見ない作曲、演奏活動を行っている。共演者は、東京フィルハーモニー交響楽団、金聖響、佐渡裕、石川さゆり、デーモン閣下、村治佳織、山下洋輔、セシル・テイラー、エヴァン・パーカー等ジャンルを問わず、俳優、舞踊家等、各界アーティストとの共演、自作曲の提供、楽曲アレンジも多数。テレビ朝日『題名のない音楽会』、NHKラジオ深夜便『にっぽんの音』等メディアに出演。2011年第24回音楽賞クラシック部門コンサート・パフォーマンス受賞。日本文化藝術財団第二回「創造する伝統賞」受賞。重要無形文化財総合指定保持者。
<http://fissoyukihiro.com/>



板倉康明 Yasuaki ITAKURA

1960年東京生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て東京藝術大学音楽学部卒業。フランス政府給費留学生として渡仏し、パリ市立音楽院、パリ国立高等音楽院を卒業。クラリネットを故三島勝輔、ギイ・ドゥブリュ、室内楽をモーリス・ブルグ各氏に師事。故アンリエット・ピュイグ＝ロジェ氏から深い薫陶を受け、現在の多彩な演奏活動の礎を築く。ソロ・クラリネット奏者として、東京都交響楽団、東京フィルハーモニー管弦楽団、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー等と共演。1996年の指揮デビュー以後、現代作品を中心に活発な指揮活動を行い、世界初演・日本初演を数多く務める。国内外の音楽祭への招聘多数。2001年より東京シンフォニエッタ音楽監督。日本音楽コンクール委員会特別賞（1997年、1999年）、第18回中島健蔵音楽賞（1999年）、東京シンフォニエッタとして第10回佐治敏三賞（2011年）受賞。



一柳慧 Toshi ICHIYANAGI（写真 岡部好）

1933年神戸生まれ。1954年に渡米してジュリアード音楽院で学び、ジョン・ケージらとの交流を通じて当時の前衛音楽に強い影響を受ける。1960年代以降、世界各地で作品を発表し、武満徹や湯浅譲二らとともに日本の前衛音楽の発展に大きく貢献した。1980年代より和楽器にも着目し作品を多数発表。近年も「一柳慧コンテンポラリー賞」を創設するなど精力的な活動が続けている。エリザベス・クーリッジ賞（1955）、セルゲイ・クーセヴィツキー賞（1956）、アレキサンダー・グレチャニノフ賞（1957）、尾高賞（1981以来5回）、毎日芸術賞（1989）、日本芸術院賞・恩賜賞（2017）など多数受賞。フランス共和国芸術文化勲章（1985）、紫綬褒章（1999）、旭日小綬章（2005）を受章。2008年文化功労者、2018年文化勲章を受章。



ルツィエ・ヴィツコバ Lucie VITKOVA (写真 ニナ・パチェロバ)

チェコの作曲家、即興演奏家（アコーディオン、箏、シンセサイザー、声楽、タップダンス）。ヤナーチェク音楽アカデミーで学んだ後、ハーグ王立音楽院、カリフォルニア芸大、ベルリン芸大、コロンビア大、NY大で研究を続ける。作曲に於いては超音波による可聴化に焦点を当て、即興演奏では音と動きの相互作用で現れる空間を探索。近年では音楽の社会政治的に関心を寄せる。2017年ハー

ブ・アルパート音楽賞受賞。ブルックリンの総合メディアセンター「ルーレット」の委嘱、2018年同センターのレジデント・アーティスト。NYコンスタレーション・アンサンブル、オペラ・アンサンブルを主宰。2017年コロンビア大学雅楽アンサンブル、夏期集中研修プログラムにて箏を中村仁美ほかに師事。アコーディオン奏者として数多くのアンサンブルと共演。
www.vitkovalucie.com



大谷康子 Yasuko OHTANI (写真 尾形正茂)

今年デビュー43周年を迎え、ピエトロ・グアルネリ(1708年製)での深く温かい演奏は「歌うヴァイオリン」と評される。これまでにソロ活動はもとより国内外の著名なオーケストラと多数共演。2017年は“キエフの春音楽祭”に招聘され、キエフ国立フィルと共演。その後、今年9月にキエフ・コンサートホール創立155周年記念公演に再び招待され再共演を果たした。来年11月にも招聘が予定されている。CDも多数。

BSテレ東(毎週土曜朝8時より放送)「おながく交差点」では司会・演奏を務める。今年7月、自身初の著書「ヴァイオリニスト 今日走る!」(KADOKAWA)を発売。文化庁「芸術祭大賞」受賞。東京音楽大学教授。東京藝術大学講師。(公財)練馬区文化振興協会理事長。川崎市市民文化大使。高知県観光特使。(公財)日本交響楽振興財団理事。
www.yasukoohtani.com



小濱明人 Akihito OBAMA

香川県高松市生まれ。琴古流尺八および古典本曲を石川利光に師事。民謡尺八を米谷智に師事。NHK邦楽技能者育成会第46期修了。NHK邦楽オーディション合格。第2回尺八新人王決定戦優勝。04年、全編即興によるソロCD『風刻』を発表。05年、『歩き遍路四国八十八カ所奉納演奏Tour』を敢行。自作曲を集めた2nd CD『波と椿と』を発表する。2012年、アジア・カルチュラル・カウンシルの助成によりNYに留学。

帰国後、自らのグループによるCD『水〜すい〜』を発表。16年、最新CD『LOTUS POSITION with 山下洋輔』を発表。国際尺八フェスティバル(シドニー・プラハ・ロンドン)、ジャパンフェスティバル(ワシントン)、スウェーデン国際吹奏楽フェスティバル等の国際音楽祭に招待参加。古典本曲や自作曲を中心としたソロ活動の他、民謡の伊藤多喜雄率いる『TAKIO BAND』等数々のグループに参加している。海外公演も多く、計35カ国で行っている。学習院大学非常勤講師。

www.2s.biglobe.ne.jp/~obama/akihito



金子純恵 Sumie KANEKO

山田流箏曲・三味線奏者、ジャズシンガー、ソングライター。千葉県出身。5歳より山田流箏曲を宮下伸に師事。2000年、東京芸術大学音楽学部邦楽科箏曲山田流専攻卒業。在学中、山田流箏曲と三味線を井口法能に師事。アカンサス賞、常栄賞受賞。2006年にボストンバークリー音楽院（パフォーマンス科ジャズボーカル専攻）を首席で卒業以後、米国東海岸を中心に演奏活動を展開している。2015年にはブルーノートNY本店にてデビューを飾り、両セット満席にするという快挙をなしとげる。海外公演も多く、南米、ヨーロッパ、中東、南アジアなど文字通り世界各地で活動。画家、舞踏家、書家など異ジャンルのアーティストとのコラボレーションも精力的に取り組んでいる。古典演奏だけでなく、オリジナルや即興演奏も得意とする。

www.sumiekanekomusic.com



荻田雅治 Masaharu KANDA (写真 Jérémie Souteyrat)

桐朋学園大学で井上頼豊氏に師事。1973年第42回日本音楽コンクール・チェロ部門第1位。82~90年東京都交響楽団首席チェロ奏者をつとめる。82年よりニューアーツ弦楽四重奏団に参加し、団として、92年第4回飛騨古川音楽大賞奨励賞、94年度文化庁芸術祭賞、94年度第13回中島健蔵音楽賞を受賞した。個人としても92年度第11回中島健蔵音楽賞受賞。国内の主要現代音楽祭に常時出演しており、独奏者としての評価も高い。2005年秋、弦楽四重奏団クットロ・ピアチェーリを結成（第1ヴァイオリン＝大谷康子、第2ヴァイオリン＝齋藤真知亜、ヴィオラ＝百武由紀、チェロ＝荻田雅治）。2006年11月からスタートした定期演奏会で、ショスタコーヴィチの全弦楽四重奏を演奏するプロジェクトを開催した。現在、東京音楽大学教授、桐朋学園大学及び東京藝術大学非常勤講師。



菅野由弘 Yoshihiro KANNO (写真 木下晃)

東京藝術大学院修士課程作曲専攻修了。1979年「弦楽四重奏曲」がモナコ・フランス・ピエール作曲賞。1994年、電子音楽「時の鏡Iー風の地平」がIMC推薦作品、2002年「アウラ」でイタリア放送協会賞、2012年日本文化芸術財団「創造する伝統賞」受賞。作品は、国立劇場委嘱の雅楽、聲明、古代楽器のための「西行-光の道」（春秋社刊）、NHK交響楽団委嘱の「崩壊の神話」、新作聲明「十牛図」、「ピアノの粒子3部作」、古代祝祭劇「太陽の記憶-卑弥呼」。NHK大河ドラマ「炎立つ」、NHKスペシャル「フィレンツェ・ルネサンス」、震災特集ドラマ「かつお」、「新日曜名作座」など。「につぼんの芸能」テーマ音楽とBGM放送中。現在、早稲田大学理工学部表現工学科教授。



黒田鈴尊 Reison KURODA (写真 ヒダキトモコ)

1983年福島県生まれ、東京都出身。幼少よりピアノを学ぶが、武満徹作曲「November Steps」を聴いた事が契機となり尺八に転向。2003年より人間国宝・青木鈴翁、三代青木鈴慕に師事。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院修士課程修了。NHK邦楽オーディション合格。NHK-FM「邦楽のひととき」に独奏で出演のほか、TV、ラジオなどに音源提供多数。完全無伴奏の一人舞台「黒田鈴尊独演会」を東京コンサート主催で毎年開催。世界各地での尺八協奏曲の初演やソロコンサートが好評を博す。2016年第二回利根英法記念邦楽コンクール最優秀賞受賞。2018年、第23回くまもと全国邦楽コンクール優秀賞受賞、国際尺八コンクール in ロンドン優勝。アンサンブル室町の公演で第13回佐治敬三賞受賞。邦楽四重奏団メンバーとして新作初演を続けながら、尺八の「今とこれから」、無限の可能性を追求している。 reisonkuroda.com



下野戸亜弓 Ayumi SHIMONOTO

山田流箏曲演奏家。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。1990年御前演奏。NHK邦楽技能者育成会35期卒業。中林照栄、谷珠美、増渕任一郎、人間国宝山勢松韻他各師に指導を受け、現在、箏組歌を鳥居名美野師に師事。1993年よりリサイタル、邦楽コンサートを企画開催。古典のみならず、現代の作曲家による新作を数多く委嘱初演する一方、自らも歌・語りを中心とした独自の箏・三絃弾き語りによる創作活動を展開。邦楽を基礎とした日本人ならではの発声と表現を追求し、より美しい言葉の響き、その歌唱力と表現力は高く評価されている。平成23年度群馬メセナ芸術文化奨励賞。（公財）日本三曲協会、山田流箏曲協会、箏曲新潮会、NPO法人三曲合奏研究グループ、前橋市文化協会、群馬県邦楽協会、宮沢賢治学会会員。現在、群馬大学教育学部非常勤講師。下野戸亜弓箏の会主宰。 <http://shimonoto.jp/>



首藤久美子 Kumiko SHUTŌ

東京音楽大学卒業。薩摩琵琶を田中之雄に師事。NHK邦楽技能者育成会43期首席修了。NHK邦楽オーディション合格。第39回日本琵琶楽コンクール第1位、文部科学大臣賞・日本放送協会賞受賞。岩城宏之指揮・相模原室内合奏団、京都市交響楽団、円光寺雅彦指揮・神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大野和士指揮・BBC交響楽団、バルセロナ交響楽団、アイヴィン・グルベルグ＝イェンセン指揮・リヨン国立管弦楽団、広上淳一指揮・京都市交響楽団、マルコ・イヴァノヴィチ指揮・ブラハ放送交響楽団による武満徹「ノヴェンバー・ステップス」を三橋貴風(尺八)と演奏。NHK「邦楽のひととき」、「芸能花舞台」、国立劇場主催第24回「明日をになう新進の舞踊・邦楽公演」、第162回「琵琶の会」出演。サントリーホール主催「卑弥呼」(菅野由弘指揮・作曲)シンガポール・エスプラネードホール出演。録音、海外公演多数。



ザック・セリグマン・カレン Zachary SELIGMAN KAREN

ニューヨーク在住のパフォーマー、作曲家であるとともに起業家。「ザック・ハップ」の名前で活動し、演奏活動は言うまでもなく、インタラクティブなインスタレーション、領域を超えたパフォーマンス、演劇作品に関わってきた。現在は自身の音楽における儀礼的意味合いに関心を寄せている。



棚橋俊幸 Toshiyuki TANAHASHI (写真 Ryuya Amao)

ウッド&エレキベース奏者。あらゆる奏法を駆使し、様々なジャンルの垣根を超える次世代ベーシスト。バックバンドのベーシストとして、またオーケストラの一員として、多くのアーティストをサポート。共演者は、Gary Burton、Michael Brecker、Charlie Haden、小曽根真、L'Arc-en-Ciel、サラ・オレイン、武田真治、KenKen、小倉唯、山崎育三郎、古代祐三など。岐阜県生まれ。トランペット奏者である父を持ち、音楽環境に恵まれて育つ。名古屋大学入学後ジャズに興味を持ち、ベースを始める。大学卒業後、奨学金を受けてボストンのパークリー音楽大学に入学。1年後にJohn Neves Scholarshipを受賞。在学中よりボストン、ニューヨークを中心に様々なライブハウスやフェス、野外コンサートなどに出演。尺八、箏を中心にしたグループ「アンサンブルリベルタ」では国内のみならず、ドイツ、カナダ、スコットランドなどの海外公演も行う。現在は東京に拠点に、ライブ演奏、CM音楽やゲーム音楽のレコーディングなどの演奏活動と並行して、サウンドプロデュース/作曲/編曲も手がける。



デヴォン・ティップ Devon Osamu TIPP

作曲家、演奏家。幼少よりゲーム音楽などのソニックサウンドに馴染み、リズムカルで主題を繰返す循環形式を得意とし、既存の音楽とは完全に切り離されたかのような独自の音楽環境を創造している。日本と東欧にルーツを辿り、雅楽邦楽の影響もひく彼の作品には、オーケストラの他に蜂蜜ディッパーを使用したベース楽器、和楽器のためのコンチェルトなどがある。彼の作品は数々の音楽祭や国際ダブルリード協会東京大会でも紹介されている。モンクレア州立大にて作曲とマイクロトーン音楽をディーン・ドラモンドに、尺八をエリザベス・ブラウンに師事。現在ピッツバーグ大学博士課程在籍。

www.greengiraffemusic.info



寺井結子 Yuiko TERAИ (写真 ヒダキトモコ)

福島市出身。三歳より佐藤恭子氏に生田流箏曲の手ほどきを受け、遠藤祐子・遠藤千晶両氏に師事。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。在学中に宮城賞及び同声会賞を受賞。その後同大学院音楽研究科修士課程へ進学、第23回国民文化祭・いばらき2008邦楽の祭典においてソリストを務める。NHK邦楽技能者育成会第55期修了。第17回賢順記念くろめ全国箏曲祭コンクール第二位銀賞・福岡県知事賞受賞。NHK

邦楽オーディション合格。NHK-FM「邦楽のひととき」「邦楽百番」出演。2015年から葛飾区文化施設指定管理者主催「夏休み伝統芸能体験 箏のおけいこ」講師。未就学児歓迎のコンサートを開催するなど、邦楽と子どもの関わりを重要視し、子育て支援拠点事業にも積極的に関わっている。生田流箏曲宮城社師範。松戸市役所箏曲部講師。日本三曲協会、森の会、妙祐会、福島県三曲連盟所属。邦楽四重奏団、現代邦楽“考”メンバー。



藤舎花帆 Kaho TOSHA

東京芸術大学大学院音楽研究科博士課程修了。邦楽囃子の分野で初の博士号を取得。同大学部在学中に安宅賞受賞。古典の枠に留まらず、洋楽や美術、文学などとのコラボレーションに次々挑戦し、和が奏でる魅力を伝えている。国際交流基金や文化庁の派遣等により海外でも広く活動する。俳優としても国内外の公演に出演する一方、囃子を藤舎呂船に師事し藤舎花帆の名で、また日本舞踊を歌舞伎俳優の松本幸四郎に師事し松本幸妃の名でも活動。日本舞踊協会、長唄協会会員、真しほ会、青濤会同人横浜国立大学非常勤講師。宇都宮大学非常勤講師。最近では自分にしか出来ない舞台をと、音楽や舞を取り入れた一人芝居に積極的に挑戦するなど、自身の美意識に基づいた独自の舞台表現を展開し、平家物語「祇王」を国内外で公演。鼓、舞、和太鼓、クラリネット、アコーディオンによるユニット「CreaTraD」を主宰し、伝統を新しく創ることに挑戦している。 www.kaho.jp/



中島裕康 Hiroyasu NAKAJIMA (写真 ヒダキトモコ)

生田流箏曲を後藤すみ子、樋口雅礼瑤、浜根由香の各氏に師事。東京芸術大学邦楽科卒業。大学卒業時には御前演奏をする。第38回茨城県新人演奏会新人賞受賞。第20回賢順記念箏曲祭コンクール賢順賞受賞。第21回長谷校校記念くまもと全国邦楽コンクール優秀賞受賞。第2回利根英法記念邦楽コンクール最優秀賞受賞。NHK-Eテレ「にっぽんの芸能〜今かがやく若手たち」に出演。2016年秋、東京文化会館にて「第1回 中島裕康箏リサイタル-挑-」、2018年春、浜離宮朝日ホールにて「第2回箏リサイタル-放つ-」を開催。CD『柴田南雄とその時代 第二期』『中瀬絹枝〜箏と歌う』『邦楽四重奏団 野田暉行邦楽作品集』『この音とまれ！時瀬高等学校箏曲部』『吉崎克彦 クリスタル』録音。正派邦楽会師範（雅号：中島雅裕）、邦楽四重奏団 所属。



中村梅彌 Umeya NAKAMURA

中村流八代目家元。父は七世中村芝翫、弟は九代目中村福助、八代目中村芝翫。義弟に十八世中村勘三郎。父 芝翫、二世藤間勘祖に師事。父・弟をはじめ、甥にあたる六代目中村勘九郎、二代目中村七之助らの歌舞伎公演の振付を担当。テレビドラマ、映画などの所作指導も担当する。自身のリサイタル「中村梅彌の會」や流儀主宰公演を開催。日本舞踊普及活動に積極的に取り組み、ワークショップ「梅の手習ひ」

を毎年開催。公益社団法人日本舞踊協会 理事。主な受賞に日本芸術院賞、文化庁芸術祭優秀賞、舞踊批評家協会新人賞受賞。代表作に『鐘ヶ岬』『太閤桜』『梅の栄』『夏魂まつり』など。



ジョン海山ネプチューン John Kaizan NEPTUNE

尺八に独自の感覚で新しいダイナミックな音をもたらしているジョン・海山・ネプチューンは、カリフォルニア生まれの米国人。1977年、都山流尺八の師範免状を取得、「海山」の号を受ける。また、英文の尺八教則本「尺八 SHAKUHACHI」を著わす。彼の2作目のレコードアルバム「BAMBOO」(東芝EMI)は、文化庁の芸術祭優秀賞を受賞した。その後も、オリジナル曲のアルバムを相次いで制作(現在計24枚)。

また日本、東南アジア、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ各国での演奏活動を精力的に続けている。伝統的サウンドからコンテンポラリージャズにわたる独自の音楽は、広く世界中に知られ、あらゆる年齢層の人々に愛されている。日本の代表的尺八奏者の一人である彼は、現在、千葉県鴨川市に住み、作曲のかたわら、尺八の製作、改良にも余念がない。



花柳達真 Tatsuma HANAYAGI

宮城県出身。6歳で「浦島」で初舞台を踏む。現在、4世家元である花柳壽輔(現花柳壽應)に師事。東京藝術大学卒業と同時に同師に振付けも学ぶ。日本舞踊協会文部科学大臣賞等受賞。国立劇場主催公演のほか、サントリーホール主催中村福助演出「卑弥呼」や東京文化会館主催「日本舞踊とオーケストラ」に振付、出演。所作指導を担当したモリス・ベジャール演出バレエ「ザ・カブキ」はパリ、ミラノ他世界各地で公演された。京都上七軒歌舞会「北野をどり」振付、指導し、同歌舞会の芸妓舞妓の専属師匠。歌舞伎、宝塚歌劇団、OSK歌劇団の振付も担当する。セルバンティーノ国際演劇祭日本舞踊公演やスペインとの国交400周年事業イベント「藝〇座日本舞踊公演」等の海外公演でも演出、振付、出演などで参加。東京藝術大学日本舞踊卒業生で結成された藝〇座(ゲイマルザ)代表。CM、ドラマ、PV等の振付も多数。



林周雅 Shuga HAYASHI (Syuga)

東大阪市出身。佐渡裕とスーパーキッズオーケストラにて2年間コンサートマスター。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部2位、中学の部奨励賞、高校の部第2位。横浜市民賞受賞。『たけしのにつぼんのミカタ』『Voice』密着取材や『ネプリーグ』『オールスター感謝祭』『題名のない音楽会』などに出演。これまでに平原綾香、石井達也、ピーゴブライソン、などと共演。また、ポップスにも力を入れて

おり、rio & syugaとしてCD3枚リリース(iTunesにてダウンロード可)。スタジオミュージシャンとして、伊右衛門CM、ジャニーズ、水曜日のカンパネラ、backnumberなどのCD録音に参加。東京藝術大学学部3年在学中。現在、長原幸太、ソンシクヤン各氏に師事。



平田紀子 Noriko HIRATA

箏、地歌三絃、十七絃箏、二十絃箏奏者。大阪府出身。幼少より永田文子、深海さとみ両師に師事。東京藝術大学卒業。在学中に宮城賞、卒業時にアカンサス音楽賞・同声会賞受賞。宮城道雄記念コンクール、賢順記念くめ全国箏曲祭コンクール、利根英法記念邦楽コンクール

【古典】で第一位受賞。アンサンブル室町の公演で第13回佐治敬三賞を受賞。平成29年度文化庁芸術祭レコード部門で優秀賞受賞。NHK-Eテレ「にっぽんの芸能」に独奏で出演。「日本作曲家協議会主催アジア音楽祭」などで各種箏の独奏を務め、様々な国の作曲家による箏作品を紹介、初演する。箏と尺八による「邦楽四重奏団」、笙と箏による「Duo Nano」でも作曲家とともに演奏会を創りあげる。生田流箏曲宮城会教師。（公社）日本三曲協会、深海邦楽会、森の会、日本音楽の教育と研究をつなぐ会、同声会、各会員。東京藝術大学非常勤講師。



深海さとみ Satomi FUKAMI (写真 ヒダキトモコ)

生田流箏曲家、三絃奏者。幼時より祖母・深海澄子に箏の手ほどきを受け、後に宮城喜代子（人間国宝）、宮城数江両氏に師事。東京藝術大学音楽部邦楽科卒業、同大学院修士課程修了。学部在学中に宮城会全国コンクール1位入賞し、大学院修了とともにリサイタル活動を開始、日本のみならず海外でも広く公演する。文化庁芸術祭優秀賞（1983）、第6回松尾芸能賞（1985）、文化庁芸術作品賞

（1987、アルバム『箏幻想』により）等を受賞。テレビやラジオでも活躍するとともに、作曲や古典の編曲も手がける。1993年より2018年まで東京藝術大学にて教鞭を執るとともに、コロンビア大学邦楽マスタークラス講師を務める。上野学園大学客員教授。宮城社大師範。深海邦楽会、深海合奏団主催。



本條秀慈郎 Hidejiro HONJOH

幼少よりピアノをはじめ15歳より三味線を始める。本條流家元本條秀太郎氏に師事し本條秀慈郎の名を許される。津軽三味線を長谷川裕翔氏に、三味線を故杵屋勝芳壽氏に師事。ACC Nakamura Kimpeiフェローシップによりニューヨークへ留学。自主リサイタル開催など国内の他、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの各地で演奏。NHK教育「日本の芸能」、TV朝日「題名のない音楽会」等出演。

作曲家坂本龍一、藤倉大とのセッションや、ソリストとして東京シティフィルハーモニック、日本フィルハーモニー等と共演。Avanti! 室内アンサンブル、Ensemble NOMAD、クアルテットエクセルシオメンバーやカリ・クリーック、クレア・チェイス、佐藤紀雄、野坂操壽、宮田まゆみ他とも共演。他ジャンルとの融合、試みも多く舞踊家の平山素子、デザイナーのリーロイ・ニューとも共演している。2018年文化庁文化交流使。現在桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。



本條秀太郎 Hidetaro HONJOH

三味線演奏家・作曲家。茨城県出身。1971年に本條流を創流。流儀曲として「俚奏樂」を発表。自由な発想で現代に生きる音楽を創作、発表している。「俚奏樂」、「江戸端唄～江戸を聞く～」や現代音楽三味線「Beads」を定期的に公演。古典の枠に留まらず、邦楽器を使った現代音楽の作曲活動・民族音楽とのコラボレーションを積極的に行い、様々なジャンルの音楽、奏者と共演するなど、民謡・民族芸能の発掘、採譜等、三味線音楽の興隆に力を尽くす。後進の指導・育成のほか、舞台、テレビの作曲活動・指導等、国内外で幅広い音楽活動が続けている。第54回文化庁芸術選奨文部科学大臣賞受賞（2004）、紫綬褒章受章（2007）。日本音楽著作権協会正会員、日本民俗音楽学会会員、現代邦楽作曲家連盟会員、中国 北京中央音楽院客員教授、桐朋学園芸術短期大学招聘教授歴任、いばらき大使、水郷いたこ大使、日本民族歌謡継承発展協会代表、日本民謡協会名誉教授。



三浦寛也 Hiroya MIURA

1975年仙台生まれ。学生時代をカナダのモントリオールで過ごし、現在アメリカを中心に活動。これまでアメリカン・コンポーザーズ・オーケストラ、ヌーヴェルアンサンブル・モダン、ニューヨーク・ニューミュージック・アンサンブル、モメンタカルテット、ジュリアード・パーカッションアンサンブル、伶楽舎メンバー等に作品を提供し、北中南米、欧州で演奏される。雅楽、即興音楽、映画音楽、インスタレーションなど、発表の場と媒体にとらわれない音楽活動を展開。コロンビア大学博士課程修了。現在ベイツ・カレッジ准教授、音楽学部長。



宮田まゆみ Mayumi MIYATA (写真 ジョージ・ヒロセ)

笙を国際的に広めた第一人者で、笙の多彩な可能性を積極的に追求している。国立音楽大学ピアノ科卒業後から雅楽を学び、1979年より国立劇場の雅楽公演に出演。1983年より笙のリサイタルを行って注目を集める。武満徹、ジョン・ケージ、細川俊夫など現代作品の初演も数多く、国内外のトップオーケストラとも数多く共演。各国の音楽祭への多数参加している。近年ではケージ『One9（笙独奏のための）』全曲演奏会、古典「調子・入調」全曲演奏会などでも高く評価されている。1998年の長野オリンピック開会式で「君が代」演奏の模様は全世界からの注目を集めた。芸術選奨文部大臣新人賞、エイボン女性年度賞「芸術賞」、中島健蔵賞、横浜文化賞奨励賞、日本伝統文化振興賞、佐治敬三賞、松尾芸能賞優秀賞、芸術選奨文部科学大臣賞をそれぞれ受賞。2018年には紫綬褒章を受章。国立音楽大学客員教授。コロンビア大学雅楽プログラムでも指導。



リッシュ・リンズィー Lish LINDSEY (写真 ジョージ・ヒロセ)

フルート、ピッコロ奏者。イースタン・ウィンド・シンフォニーとともにピッコロ奏者としてカーネギーホールデビューを果たす。同楽団首席フルート奏者。日本、中国、イタリア、英国などでの演奏のほか、ブロードウェイミュージカル「ファインディング・ネバーランド」では常任代理奏者も担当した。キャピタル・フィル管弦楽団等ではピッコロ奏者として活躍。ジョシュ・グローバンやロックトピア、セルティック・サンダーなどジャンルの異なるアーティストらのツアーにも多数参加。コロンビア大学で雅楽を学び龍笛をルイズ・ササキ、笹本武志、八木千暁らに師事。コロンビア大雅楽アンサンブルやNY天理教雅楽会らと共に共演。現在ブルックリン・カレッジ、ニュージャージーシティー大、ウィルクス大等の非常勤講師。

lishlindsey.com



コール・ワグナー Cole WAGNER

1994年東京生まれ、3歳で家族と共に帰国後、チェロを学ぶ。NY移転後はジュリアード、マネス音楽学校やセント・ルーク・オーケストラ、スティーブ・ライヒ・アンサンブルのメンバーらに師事する傍ら、インターローケン夏期プログラム、アマティ音楽祭にも参加。2015年Upbeat NYCの一員としてベネズエラ訪問。巨匠グスタボ・デュダメル指揮のもとエル・システマ主格メンバーらと共に共演、NYCでその教育的プログラムの普及活動、さらにラジオシティーやマディソンスクエアガーデンの青少年育成音楽プロジェクトにも携わる。現在コロンビア大学にて中世の音楽、歴史、芸術、文学を学ぶ傍ら、同大学オーケストラ（ダブルベース）、バーナード＝コロンビア室内合唱団にて所属し、雅楽邦楽プログラムで雅楽を習得。2017年の夏期集中研修プログラムにて笹本武志ほかに師事。



司会進行： 田中隆文 Takafumi TANAKA (写真 富山淳)

(有) 邦楽ジャーナル代表取締役・邦楽ジャーナル編集長。1955年大阪府出身。関西大学社会学部卒業。1987年月刊誌「邦楽ジャーナル」を創刊、邦楽の普及に取り組むと同時に邦楽界の諸問題に切り込む。邦楽のCD、書籍などをネットと誌上で販売、演奏家と愛好者間のパイプ役も果たす。1999～2005年、日本初の邦楽専門ライブハウス「邦楽ジャーナル倶楽部・和音」開業。2001～10年邦楽界最大規模の総合イベント「日本の音フェスティバル」企画制作（JASRAC主催）。2006～2010年NYにおける世界最大規模の芸術見本市「APAP」関連公演として「Hogaku : New Sounds of Japan」プロデュース、同時に講演（国際交流基金主催）。2006～2018年邦楽アソシエーションを創設して邦楽器業界月刊紙「和楽器文化」発行。2010年「宇宙箏」を小川楽器と製作、山崎直子宇宙飛行士が宇宙ステーションで演奏。2012年に京都で、2018年にロンドンで国際尺八コンクールを主催。

JAPANESE CLASSICAL MUSIC

SACRED, COURT *and* EARLY MODERN SALON MUSIC



GAGAKU & HŌGAKU ENSEMBLES



The Columbia Gagaku-Hōgaku Program

Our Goal

By establishing the first permanent Gagaku-Hōgaku training program for Western students of music in New York, the music center of the US, our responsibility is not to dilute the multiple traditions that constitute the classical Japanese musical lineages, but rather to make it possible for Western students to experience them deeply and to master one or more of Japan's musical instruments, just as Japanese students train and master Western musical instruments today. Our hope, too, is that not only will the classic Japanese repertory become familiar more widely among American audiences, but that these magnificent instruments will be used in new compositions by and for these young musicians, thereby greatly influencing the future of our music environment.

Our long-term goals are to see that Japanese music finds a permanent home in New York in Columbia's academic programs, including Music Theory; the Music Performance Program; and the Composition Program, so it will not be endangered by politics, economics or generational faculty changes. In the long run, however, the Columbia Gagaku Instrumental Ensemble and the Hōgaku Ensemble are being nurtured so that they become an influential part of the mainstream permanent music scene in New York and in other cities around the world.

Welcome to the
Celebratory Tokyo Concert
Commemorating the 50th Anniversary
of the
IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives (founded in 1968)
Columbia University

Thursday, November 8, 2018
at Yomiuri Ōtemachi Hall
(Yomiuri Shimbun Tokyo HQ Bldg.)
1-7-1 Otemachi, Chiyoda-ku, Tokyo
6:30 PM – 8:00 PM

Organized by

IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives, Columbia University

Supported by

Tides Foundation, Toshiba International Foundation, Medieval Japanese
Studies Foundation, Sumitomo Corporation of Americas Foundation,
Ajinomoto Co., Inc.

~ In Celebration of 50 Years ~

This year 2018 marks the 50th anniversary of the founding of the international, interdisciplinary IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives, an Institute housed at Columbia University in New York City. Since 1968 the Institute has pioneered the creation of ongoing and transformatory institutions.

The Institute, known internationally for its impact in a wide range of Japan-related fields, rediscovered in Ireland, the UK, France, Germany, the USA and elsewhere hundreds of glorious hand-illuminated and calligraphed Japanese medieval books and hand scrolls lost to Japan in hard times, and in the 1970s-80s its unprecedented collaborative research and publication projects raised to global consciousness the importance and power of this huge genre of illuminated Japanese medieval books and scrolls. In the 1990s-2000s, the Institute brought to first light the history and lives of imperial abbesses and their jewel-like Buddhist nunneries still active around Japan. Most recently it has now institutionalized at Columbia the one (and still only) program for credit that trains student instrumental ensembles under world-class mentors to perform the repertoires of the glorious court and secular music both classical and modern pieces for Japanese heritage instruments, which were almost swept away by the force of Meiji-period policy which caused an inundation of European instrumental music. New young generations in Japan and worldwide are now engaged in a renaissance of this glorious Japanese heritage instrumental music.

All of the works on tonight's program, both classical and modern, were chosen to celebrate the 50th anniversary milestone of our Institute and to offer thanks to all those who have made our journey possible. From the earliest 6th-century *Music of the Divine Heaven (Etenraku)* to the most contemporary works composed just for this concert, each in its own way rejoices at the universal human engagement with music and the restorative powers it provides to self, to community, and to that which binds us together in this world.

Our music is designed to demonstrate the heart of our ongoing mission: *Treasuring the Past, Enriching the Present, and Engaging the Future.*

May the music inspire those same qualities in each and every member of the audience. As we open ourselves to the oldest orchestral music on earth and to the newest music played on these same astounding Japanese instruments, may tonight be a renewing milestone for us all.

Program Notes

Tsuru no sugomori (Nesting of Cranes)

Shakuhachi: John Kaizan Neptune

A great shakuhachi classic: loving cranes nurturing chicks; offspring fly away; the old cranes die.

Hyōjō no netori & Etenraku (Sacred Court Music: Music of the Divine Heavens)

New York Members from the Columbia Gagaku Ensemble,
joined by Mayumi Miyata, one of their eminent Japanese mentors.

Shō: Zachary Seligman Karen, Mayumi Miyata

Hichiriki: Devon Tipp, Lucie Vitkova

Ryūteki: Lish Lindsey, Cole Wagner

Hyōjō no netori (Prelude Mode Centering on the note of E)

Japanese Gagaku music of continental origin (*Tōgaku*) retains six major modes adopted from Chinese music. A *netori*, or tuning, is a short, free-rhythm prelude which serves to set the pitch, tone, and melody for all the instruments in a Gagaku ensemble. Literally *ne* (tone) and the verb *toru* (to catch) reflect the musicians' introductory catching and holding the voice of their own and others' instruments and then by breathing together, boarding the same musical wave. By establishing the atmospheric setting for both the players and the audience, it exhibits the mood, or seasonal characteristics of the piece that follows it -- in this case the Hyōjō mode for the following *Etenraku*.

Etenraku (Music of the Divine Heavens)

Etenraku is the most fundamental of ancient sacred classical Gagaku orchestral pieces. Such works were not viewed as entertainment for humans, but rather as offerings to the gods, just as early Western music was religious offertory music. Its title, which refers to the "Music of Heaven" dates back at least to the T'ang Dynasty (618-907) in China. The ethereal nature of its unworldly melody becomes addictive, the more one hears it.

Etenraku is probably the most familiar piece of sacred music from the elite Gagaku repertory for most Japanese today. Since the end of the 19th century it has become a tradition to play it at specially significant cultural events such as weddings and formal celebratory occasions at schools, and at rituals

at both shrines and temples. In New York, we always open our seasonal concert with *Etenraku*, played as an offertory for all the powers that be in the cosmos. We are just privileged to listen in.

The melody consists of three sections, each of which is repeated twice. If we identify each section as a, b, c, tonight's performance will be performed as: abc ab.

Improvisation on Etenraku

Shakuhachi: John Kaizan Neptune



Mitsudo (Density) composed by Toshi Ichiyanagi (b. 1933; Pianist and Composer; Recipient of Japan's highest "Order of Culture")

Koto: Yuiko Terai, Hiroyasu Nakajima

Sangen: Noriko Hirata

Shakuhachi: Reison Kuroda

Toshi Ichiyanagi, this year honored with the Japanese government's highest award for culture, the Order of Culture, was the first to introduce the avant-garde music of John Cage and others in the 1960s and 1970s to Japanese audiences. He is also acclaimed as one of the most important explorers of Japan's earliest native music and for his replication project of ancient Shōsōin instruments reborn for performance by his *Ensemble Origin*. For more than a decade he has been a treasured advisor to Columbia's Gagaku/Hōgaku program and a supporter of IMJS efforts to nurture young composers of Japanese heritage instruments.



Songs of Otomae Reborn

Though the music was lost, the lyrics from the repertory of the 12th-century popular song celebrity, Otomae, remain, copied down from her performances by Emperor GoShirakawa and collected by him as *Ryōjin Hishō* (*Treasured Collection of Superb Songs*). To resurrect her songs, three composers have created music to bring her universally moving songs to life again.

Two of Otomae's songs

Music by Ayumi Shimonoto

Voice: Ayumi Shimonoto

Tsuzumi: Kaho Tōsha

Otomae's song no. 566

I kept thinking that one of these days
I'd pick a bouquet of fresh greens to delight you.
But here I am having picked them instead
for the altar as prayers for your soul.

Otomae's song no. 265

The *miko* at Kinbu's holy peak
strikes her hand-drum, loud, then soft.
How mesmerizing is her beat.
Oh, do come on, let's go there too!
Pon-pon, don-don,
resounding on and on
How does she manage to drum like that
thrumming on endlessly?

Three of Otomae's Songs

Music by Hiroya Miura (b. 1975)

Voice: Ayumi Shimonoto

Violin: Shūga Hayashi

Tsuzumi: Kaho Tōsha

Otomae's song no. 336

Endless days, endless nights
sleeping alone
Longing for another woman's man,
Useless, how useless,
Don't need him, don't want him.
From evening on to the midnight hours
I somehow manage.
But when the rooster calls to announce the dawn
My unvisited bed feels cold, so cold.

Otomae's song no. 460

What dream was last night's dream?
Long ravenous with desire,
suddenly
we fall into bed, and all hands,
all night,
press hard in each other's embrace.

Otomae's Song no. 26

They say Lord Buddha's everywhere
always with us, here and now,
yet sadly he'll not show himself
in real life flesh and bones.
Only in dawn's silent hours
when human sounds all cease
can we catch a glimpse of him
in early morning dreams.

One of Otomae's most famous songs

Music by Sumie Kaneko

Voice: Sumie Kaneko

Acoustic Bass: Toshiyuki Tanahashi

Otomae's song no. 359

Could it be we're born for pleasure?
Can it be we were born for games?
The joyful shouts of children playing
always stir me up again,
old as I am,
even me,
all of me.



In Honor of the Institute's 50 years

Utagaki (1990) composed by Hidetaro Honjoh (b. 1945)

Shamisen: Hidetaro Honjoh & Hidejiro Honjoh

Utagaki is one of Japan's oldest genre of community festivals where young and old, male and female, gathered to rejoice and sing the happiness of a good harvest, the happiness of finding a good mate, and the sympathetic magic involved in the pure and natural fertility of both of our earth and our people. The rhythmic call of the genre is maintained while at the same time improvisation is expected as we recognize the separate individual needs and rhythms of nature and of our loved ones. Utagaki are harvest songs, offertories, and love songs that celebrate the natural life rhythm of our planet.

Improvisation

Shamisen: Hidejiro Honjoh

Shakuhachi: Akihito Obama



Kikka Kōran (Chrysanthemum Bewitchment) composed by Yoshihiro Kanno (b. 1953) (World Premiere)

A dance drama inspired by Nara emaki scroll Kiku no Sei Monogatari (Spirit of the Chrysanthemum), preserved at Harvard Art Museums.

Nōkan:	Yukihiro Issō
Shō:	Mayumi Miyata
Biwa:	Kumiko Shutō
Koto:	Satomi Fukami
Clarinet:	Yasuaki Itakura
Violin:	Yasuko Ohtani
Cello:	Masaharu Kanda
Dancers:	Umeya Nakamura & Tatsuma Hanayagi

This medieval story in hand-painted and calligraphed scroll form left Japan in hard times and is resting safely in the former Fogg collection of Harvard University Art Museums.

Entitled *Kiku no Sei Monogatari (Spirit of the Chrysanthemum)* (alternate title *Kazashi no Hime no Monogatari (Princess Kazashi)*) tells of a lonely young girl comforted only by the flowers in her garden, especially in the season of chrysanthemums, which she loved the best. One day her love of the flower evoked the Spirit of the Chrysanthemum in the form of a beautifully handsome man. The story is their love story, and its tragic abrupt end brought about when her father is required to cut and send away his chrysanthemums to display at the annual Chrysanthemum Festival.



Detail of the fan created by Nasubi Tajima

(Program notes by Barbara Ruch)

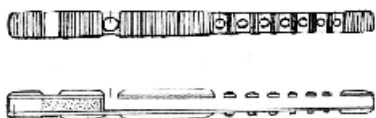
Japanese Heritage Instruments Used in Tonight's Concert



The *shō* is a free-reed, 17-pipe mouth organ, with origins in East and Southeast Asia. It has been found in recent Chinese excavations to date back as early as 433 BCE. Its formal name is *hōshō*, or “phoenix pipe,” because it is shaped like a phoenix bird with its wings closed. The *shō* is said to sound like the call of this legendary bird. In ancient China the dragon and the phoenix were viewed as a powerful chimerical pair, each with the ability to transverse from the highest heavens down to our world and back again. The 17 bamboo pipes of the *shō* are of varied lengths, each set with drops of wax into a bowl-shaped wind chamber with mouthpiece. At the lower end of 15 of the pipes are fastened free-reeds made of metal that sound when both exhaling and inhaling so that the instrument is capable of continuous sound. Fingering is complex and can produce single-tone melody one pipe at a time, but can also create multitudinous chord clusters of up to six tones simultaneously. The *shō* must be heated before and during play to prevent moisture interference on the reeds that can affect its pitch and tone.



The *hichiriki* is a double-reed vertical bamboo pipe with seven fingerholes on the top, and two for the thumbs on the reverse side. Its origins are unknown, but it was used in Tibet and western regions of ancient China before coming to Japan during the reign of Female Emperor Suiko (592-628). Its popularity during the 10th and 11th centuries in Japan is attested to by its mention in such famous literary works as the *Tale of Genji* by Lady Murasaki, and Sei Shōnagon's *Pillow Book*. Its name implies both feelings of sadness and trembling, or wavering out of awe, or even fear. It has no capacity for soft, pale tones, and indeed its sharp, piercing sound can strike terror, but its large, loose double reed, which is inserted with a white paper wrap, makes smooth portamento glides one of its characteristics. It has a narrow range of about one octave, and its bore has an inverse cone shape; thus, despite its small size it sounds an octave lower than an oboe, for example.



The *ryūteki*, literally the “dragon flute,” originated in the western regions of China and Tibet. In Chinese legend a Tibetan heard a dragon calling as it plunged from the heavens into water below. Trying to

reproduce its call, he cut a length of bamboo and blew into it, producing a sound that perfectly resembled the dragon's voice. Unlike flutes of Korean and Japanese origins, which have six finger holes, the *ryūteki* has seven large finger holes which make possible, through varied finger positions and breath pressure, two full octaves, with intervening continuances. The instrument is hollowed-out bamboo with a very large bore. Its surface is stripped off and wrapped in thread-like strips of cherry or wisteria bark and then lacquered inside and out. The *ryūteki* is one of three types of flutes employed in gagaku ensembles and is the instrument that most often begins a gagaku piece.



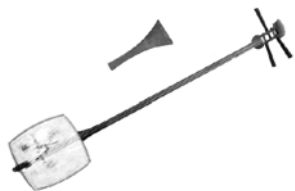
The *shakuhachi*, is an end-blown bamboo flute that has been played in Japan for over 1200 years. Literally meaning 1.8 *shaku*, the name refers to its size. *Shaku* is an archaic linear unit slightly smaller than one foot in English measurement that is subdivided

into ten sub-units, or *sun*. Thus, *shakuhachi* (尺八) means "one *shaku* eight *sun*" which is the standard length of a *shakuhachi*. Although the instrument can now come in different sizes, all are still referred to generically as *shakuhachi*. After dropping out of the Gagaku orchestra, its 12th-century form is believed to have been brought back from China by a Zen Buddhist priest. It is the only instrument associated with the meditative practice of Zen Buddhism, and was utilized during religious rituals by priests of the Fuke sect.

During the Edo Period (1600-1868), *shakuhachi*-playing monks known as *Komusō* ("Priests of Nothingness") wandered throughout Japan playing the *shakuhachi* in exchange for food or alms. They would pass from temple to temple, learning pieces associated with the various temples, where each had developed its own music. The traditional *shakuhachi* repertory, or *honkyoku*, is performed solo and is considered an expression of the voice of the original bamboo from which each instrument is made. The music is reflective and contemplative, and the player's breathing and the instrument's penetrating sound often produces an effect similar to sitting in Zen meditation.

The *shakuhachi* as we know it today was perfected in the 17th century. With the abolishment of the Fuke sect in 1871 the instrument became popular with the general public in combination with the *shamisen* and *koto* in popular entertainment. Today there are several different and distinct styles of playing the traditional *honkyoku* repertory, represented by different schools

of playing that reflect differences in mouthpiece construction as well as in blowing techniques.



The *shamisen* is a three-stringed, long-necked instrument with a sound box over which is stretched cat or dog skin. It is played with a plectrum called a *bachi*. Similar in construction to that of a guitar or a banjo, it is a plucked stringed instrument with a fretless neck, its strings stretched across the resonating body.

The Japanese *shamisen* originated from the Chinese instrument *sanxian*, which was introduced to Japan through the Ryūkyū Kingdom (Okinawa) in the 16th century. In Japan its forms evolved in several directions and it became wedded to Japanese narrative literary and theater forms and to song as an instrument of accompaniment.

There are three basic sizes of *shamisen*; *hosozao* (thin-necked), *chūzao* (medium-necked), and *futozao* (thick-necked). Depending on the genre of music played, both the size and the shape of the *shamisen* and the *bachi* will differ. Some examples of *shamisen* accompanied genres include *nagauta*, *jiuta*, and *min'yo*. There is also the solo *tsugaru-jamisen* genre that has now evolved into a popular modern musical form. In most genres the *bachi* is often used to strike both string and skin, creating a highly percussive sound. In *kouta* style, and occasionally in other genres, the *shamisen* is plucked with the fingers rather than with a *bachi*. The left hand rides the neck pressing the strings to the neck to create pitch and timbre.



The *koto* is a 13 stringed musical instrument made from *kiri* wood (Paulownia) that has two sounding holes on the reverse side. The strings are strung over 13 movable bridges along the length of the instrument. Players adjust the string pitches by moving these bridges, and by applying pressure to the strings with the left hand. Three fingernail-like caps on the thumb, index, and middle finger of the right hand are used to pluck the strings. The bridges (*ji*) used to be made of ivory, but nowadays are typically made of plastic or occasionally wood. The strings are made from a variety of materials and while plastic strings are popular, silk strings are still made. There are also *koto* with more than 13 strings including the 17-string bass *koto* (*jūshichi-gen*), 21-string, and 25-string *koto*. The ancestor of the *koto* was the Chinese

instrument *guzheng* that was first introduced to Japan from China in the 7th and 8th century, though the modern *koto* originates from the *gakusō* used in Japanese court music.



The Japanese *biwa* lute is one of Japan's oldest and most revered instruments. Related to the Chinese *pipa*, it eventually evolved in Japan into seven diverse types from the percussion-like *gaku-biwa* with small plectrum, 4 strings and 4 frets, used in *gagaku* orchestras, to ritual instruments played to placate the dead on battlefields and temple grounds by wandering blind priests. The hero of *The Tale of Genji* is famously depicted in early paintings playing a courtly *biwa* in quiet contemplation. The special *Heike biwa* was a type played to provide the background acoustic aura to the great recited epic, *The Tales of the Heike*. The *biwa* employed by Composer Kanno in tonight's premiere of his *Chrysanthemum Bewitchment* is a Satsuma *biwa*, the origins

of which were in Satsuma (present-day Kagoshima in Kyūshū) in the late 15th century. Traditionally played by samurai to recount moral-laden battle tales, the Satsuma *biwa* with its wide plectrum, 5 strings and 5 frets and thrilling drone possibilities, has a deeply emotional voice and the potential for broad use in modern music.

MUSIC PERFORMANCE PROGRAM

COLUMBIA UNIVERSITY

Columbia University offers the only program in the continental USA where Japanese instrumental training is available for credit. The program, part of the Music Performance Program (MPP) of Columbia University, seeks to enable students to develop as musicians within the academic setting of Columbia, by providing and facilitating opportunities for instrumental instruction, participation, and performance. Offerings in the MPP are subdivided into private instrumental lessons and a range of sponsored and affiliated performing ensembles.

One of the main goals of the MPP is to provide high-quality music instruction to students within the stimulating intellectual atmosphere of a fine liberal arts college. Many students involved in the MPP are majors in subjects far removed from music; others double major in music and some other discipline.

MPP UN1551 WORLD MUSIC ENSEMBLE: Section 002
Gagaku: Japanese Sacred and Court Music

MPP UN1551 WORLD MUSIC ENSEMBLE: Section 003
Hōgaku (shakuhachi): Japanese Early Modern Chamber Music

MPP UN1551 WORLD MUSIC ENSEMBLE: Section 004
Hōgaku (koto): Japanese Early Modern Chamber Music

For program enrollment and all other inquiries
About the Gagaku-Hōgaku initiative, please contact

IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives
medievaljapan@columbia.edu

COMPUTER MUSIC CENTER and SOUND ARTS PROGRAM

COLUMBIA UNIVERSITY

Originally called the Columbia-Princeton Electronic Music Center, the Computer Music Center (CMC) is the oldest center for electroacoustic music in the United States. The primary mission of the CMC is to operate at the intersection of musical expression and technological development, and as a result the Center has become involved in a broad range of innovative projects. The CMC also produces events aimed at reaching out to a wider community, both locally in New York and globally in a number of different international venues.

Most recently, the CMC is supporting the new Sound Arts MFA Program offered by the School of the Arts in association with the Department of Music. Sound Arts students work closely with faculty from Composition, Ethnomusicology, the Computer Music Center, Visual Arts and the Music Performance Program's Japanese instrumental training ensembles to develop new creative works with a deep engagement with sound as medium. The CMC, in collaboration with the IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives, has launched music research and teaching programs based on Japanese *wagakki* instruments, most recently, the sonic analysis of various types of koto, reports of which have been published in the August 2015 and December 2016 issues of *Hōgaku Journal*.

For more information about the CMC (including upcoming events), please visit: <http://music.columbia.edu/cmc/>

For information about the new Sound Arts MFA:
<http://arts.columbia.edu/sound-arts>



Brad Garton
Professor of Music
Director, Computer Music Center and
Deputy Director, IMJS: Japanese
Cultural Heritage Initiatives

MENTER/PROTÉGÉ SUMMER PROGRAM

COLUMBIA UNIVERSITY

~ 6 weeks in Tokyo ~
~ Annually May – July ~

Group and one-on-one lessons with Japanese masters of:

the 17-pipe mouth organ shō
the ryūteki flute
the double-reed hichiriki
the end-blown bamboo shakuhachi flute
The 13-string koto zither
with additional instrumental training possible

To qualify, students must have enrolled in at least two semesters of either the “World Music Ensemble: Gagaku” or “World Music Ensemble: Hōgaku” course. Knowledge of the Japanese language is not required; but musical aptitude and instrumental progress on a Japanese instrument during the ensemble course will be the deciding factors.

Airfare, housing, and the costs of six weeks of intensive instrumental training with a Japanese master will be covered. Students are responsible for their own food and personal expenses.

Preference will be given to students planning to return to New York in the fall and continuing as pioneering members of the Columbia Gagaku and Hōgaku Instrumental Ensembles of New York, looking forward to performances in New York, Tokyo, and elsewhere.

We are ardently seeking patrons to assure the sustainability of this fellowship program.

For further details please contact ka63@columbia.edu.

WHAT IS THE TOKYO ACADEMY OF INSTRUMENTAL HERITAGE MUSIC

There has, until now, been no institution in the world where musicians and composers can train on Japanese instruments (*wagakki*) on the basis of talent and audition alone irrespective of language. Japanese universities of music require written entrance exams in the Japanese language among other academic subjects, which makes entrance impossible for professional musicians from around the world. Training, collaboration and exchange have depended on the karmic accidents of individual friendships and on *ad hoc* efforts. Some have been miraculously fruitful. But this is no way to ensure the future of a great world treasure.

Planning for such an Academy began about seven years ago. The on-going stumbling block was the mindset that such an Academy must start with a *building*. Actuation processes became mired in perhaps a 19th-century image of a conservatory. In 2013 a different model was chosen, and the Tokyo Academy of Instrumental Heritage Music was launched. It's TAIHM we thought. (Forgive the English pun on "It's now time.")

So, what is the Tokyo Academy of Instrumental Heritage Music? It is not a building or a place. It is a living concept—a people-to-people program made up of renowned masters of Japanese heritage instruments eager to teach talented protégés from anywhere globally and musicians eager to add *wagakki* instruments to their own musical accomplishments and to incorporate *wagakki* pieces from the huge 20th-century body of Japanese-composed music into major repertoires of their home orchestras and ensembles in Japan and abroad.

TAIHM, with a support office in New York and an administrator in Tokyo, and the exciting new collaboration with International House of Japan (Roppongi) and Musashino Gakki Instrument School (Ōji), looks forward to contributing globally to nurturing non-Japanese musician leaders abroad.

For further details please visit: www.taihm.org

Global Artist Residency Program

TAIHM launched its first program in September 2013 — the *Global Winds Instrumental Artists Residency* — designed for well-established Western wind instrumentalists abroad who wish to add the skill of playing a Japanese wind instrument to their already high level of achievement in Western music. After a global call for applicants, the first *Global Artist in Residence* was announced on December 23, 2013: **Rosamund Plummer**, Principal Piccolo, Sydney Symphony Orchestra. She arrived in Tokyo on February 25, 2014 to train on the ryūteki. Her primary master was Takeshi Sasamoto, official mentor to Columbia University's ryūteki students, and member of Reigakusha orchestra. Beginning with the classical Gagaku work, *Etenraku*, on the 430 Hz ryūteki, she then trained on the 440 Hz ryūteki so as to be able to introduce contemporary Japanese works into the Sydney Symphony repertoire upon her return to Australia. **Jinny Shaw**, oboeist from the Halle Orchestra and Okeanos Chamber Sextet of the U.K. was the Second Global Artist, whose Tokyo residency under Mayumi Miyata on the shō was undertaken in 2016. The Third Artist in Residency was **Trond Magne Brekka**, flutist of the Oslo Symphony Orchestra and the Norwegian Academy of Music who pursued a residency on the shakuhachi with Kaoru Kakizakai in 2018, at which time Toshiba International Foundation took over support of this TAIHM program in recognition of the Global Artist Residency program's influence on training new leaders in Japanese heritage music globally.

**We are grateful to the following supporters for their
creative and financial support:**

(in alphabetical order)

味の素株式会社 (東京)

味の素ノースアメリカ社

シャネル・ネクサスホール (東京)

国際文化会館 (東京)

国際交流基金 (東京)

国立音楽大学 (東京)

Medieval Japanese Studies Foundation (New York)

武蔵野楽器 (東京)

国立情報学研究所 (軽井沢)

小野雅楽会 (東京)

新日鐵住金文化財団 (東京)

米州住友商事会社財団 (New York)

玉川大学・玉川学園 (東京)

Tides Foundation (San Francisco)

東芝アメリカ社 (New York)

東芝国際交流財団 (東京)

東洋英和女学院 (東京)

and all the donors who wish to remain **anonymous**

Maintenance of Japanese heritage instruments
at Columbia University was made possible
by generous donations by **Miho Ito**.

コロンビア大学中世日本研究所・日本文化戦略研究所

IMJS: Japanese Cultural Heritage Initiatives

Japanese Heritage Music

所長: バーバラ・ルーシュ

所長代理: ブラッド・ガートン

副所長: 青木健

プログラムオフィサー: 米山朱実

音楽監督: 三浦寛也

顧問: 一柳慧

薦田治子

田中隆文

舞台監督: 長尾光裕 (エムラッシュ)

今村麻奈美 (エムラッシュ)

メディア広報: 村田起代子

ウェブサイト: エイミー・ヴァイダ (Amy I Productions)

照明: 小川修

映像: 栗山裕次郎

記録: 熊倉次郎

運営: 野口岳彦 (トゥモローハウス)

額瀨史子 (トゥモローハウス)

よみうり大手町ホール: 大前暢宏

メンター・プロテジェ・プログラム

東京コーディネーター: 山本華子

グローバル・アーティスト・レジデンシー

東京コーディネーター: 伊東美穂

国際文化会館リエゾン: 前田愛美



**IMJS: JAPANESE CULTURAL HERITAGE INITIATIVES
COLUMBIA UNIVERSITY**

407 Kent Hall, MC 3907
1140 Amsterdam Avenue
New York, NY 10027
Tel: (212) 854-7403
Fax: (212) 854-1470

Email: medievaljapan@columbia.edu
www.imjs-jchi.org

*The *kaō*-signet of music, art and religion patron,
Shōgun Ashikaga Yoshimitsu (1358-1408).

当研究所のロゴとなっている足利義満の花押は、研究所設立に当たり
京都大学教授故阪倉篤義先生に選んでいただいたものです。